

World's Famous Classics 84

H・G・ウェルズ

タイム・マシン

短編

H. G. Wells

THE TIME MACHINE,

A・ハックスリー

すばらしい新世界

小アルキメデス

A. Huxley

BRAVE NEW WORLD

YOUNG ARCHIMEDES

World's
Famous
Classics
84

全集

MACHINE, etc

WORLD, YOUNG ARCHIMEDES

ワエルズ A・ハックスリー / 瀬尾裕 瀬尾泰子 松村達雄 訳

ム・マシーン / 短編 / すばらしい新世界 / 小アルキメデス

A Wave Hoxley

世界文学全集——84

ウェルズ／ハックスリー

1976年3月24日第1刷発行

訳者 瀬尾 裕／瀬尾泰子／松村達雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社堅省堂

© KODANSHA 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文3)

目次

ウエルズ

タイム・マシーン……………瀬尾 裕 5

短編

盲人国……………瀬尾 裕 89

幻影の扉……………瀬尾 裕 114

ダイヤモンドを造る男……………瀬尾 裕 132

駝鳥の競売……………瀬尾 裕 140

コレラ菌泥棒……………瀬尾 裕 145

発電機の神様……………瀬尾 裕 152

ハックスリー

すばらしい新世界……………松村達雄 163

小アルキメデス……………松村達雄 361

ウエルズ 解説・主要作品解説・年譜……………瀬尾 裕 400

ハックスリー 解説・主要作品解説・年譜……………松村達雄 429

写真撮影 || 仁田三夫／畑野文夫

写真提供 || オリオンプレス

装幀 || アド・ファイブ

ウェルズ

タイム・マシーン

瀬尾 裕訳

『タイム・マシーン』主な登場人物

タイム・トラベラー——飛行機が発明される以前の十九世紀末のこの小説の他の登場人物たちは、人間は水平には運動できるが上下にはほんの少ししか運動できない。まして、時間の中を運動することは全く不可能だ、他の人々の意見に対し、彼は、それは可能だ、時間の中を過去にも未来にも自由に動く機械を僕は発明したのだからと言い、未来世界の人類はどんなだろうかと探険に出発してゆく好奇心旺盛で知的な人物。勿論作者の分身。

エロイ——タイム・トラベラーが紀元八十万二千七百一年の未来世界で見つけた人類で、ブルジョアの後裔と考えられる。働かないで一見気楽に暮しているように見えるが、実は、モーロックたちに飼育されていて食べられて

しまう食肉牛の状態に退化した人類。

モーロック——地下に住み、夜になると地上に出て、エロイたちを掴んで地下に運び、その肉をたべて生活している肉食人種。プロレタリアの後裔で地下で機械を動かすのが仕事。作者の母親が家政婦として勤めていた大地主の大邸宅で、召使たちは半地下室で生活していたのを少年時代に見ていたもので、それからヒントを得たのではないかと思われる。

ウィーナ——タイム・トラベラーが未来社会に行つたとき、浅瀬で水浴中におぼれそうになつたのを助けてやつた、可愛い小さな女性。タイム・トラベラーと親しく口をきき、行動とともにした唯だ一人の人間。

彼女がくれた白い花は、「現代」に帰つて来たタイム・トラベラーが、「未来」に行つて来たのだという唯一の証拠であつた。

「時間を旅する人」(そう呼ぶのが便利だろう)が、深遠な問題をわれわれに説明していた。灰色の目がきらきらと輝き、いつもは青白い顔が紅潮して、生気を帯びていた。暖炉の火は赤々と燃え、百合形の銀のシャンデリアのきらめく光のやわらかい輝きが、われわれのコップの中の酒の泡を照らすと、泡はさつときらめき一瞬のうちに消えて行つた。われわれが坐っていた椅子は、彼が考案して特許を取つたものでしたので、しぶしぶ坐つてもらつてゐるというよりむしろ、われわれを抱擁し、愛撫しているかのようだった。そして、思考が正確さの束縛から解放されて優雅に駆けめぐる、あの食後の豪華な雰囲気(がわれわれを取り巻いてゐた)。彼は、細い人差し指で要点要点を強調しながら、次のように述べた。そして、われわれは、坐つたまま、彼のこの逆説(とわれわれには思ふたのだが)に抱く真剣さと豊かな想像力にもうげに感心してゐた。

「よく注意して聞いてくれたまえ。僕はこれから、ほぼ一般的に認められてゐる一つ一つの観念を論駁しようとしてゐるんだからね。たとえば、君たちが学校で学んだ幾何学は間違つた考え方の上に立っているんだ」

「僕達に、始めっからそんな大きな要求するのは少し

無理じゃないかね？」と髪の毛の赤い議論好きなフィルビーが言つた。

「僕はなんにも、合理的な根拠のないものを無理矢理に認めるなんて言つてやしないよ。君達もすぐに、僕が認めてほしいと思つてゐる程度(のことは認めるようになるさ。君たちだつて勿論知つてゐるだろう。数学的な線、つまり幅の無い線というやつは、実際的には存在しないのだ)ということ(は、学校で習つたろう。数学的な平面だつて同じだ。そういったものは単なる抽象にすぎないのだ)」

「そりや、その通りだよ」と心理学者が言つた。

「そして、縦と横と高さしか持たない立方体も実際には存在しないのですよ」

「僕は反対だな」とフィルビーが言つた。「立方体は存在しうるのだ。実在するものはすべて……」

「たいていの人はそう考へるでしよう。しかし、ちよつと待つて下さい。瞬間的な立方体は存在し得るかね？」

「それはどういふ意味なんですか」とフィルビーが言つた。「時間的に存続しない立方体が実在し得るだろうかということさ」

フィルビーはじつと考へ込んでしまつた。タイム・トラベラーは話を続けた。「実在するものはどんな実体も四つの次元で延長を持たなければならぬ。つまり、縦、横、高さ、そして——持続。しかし、人間の肉体の本来

的な弱さのために、われわれはこの事実を見逃しがちなのだ。人間の肉体の弱さということについては後で詳しく説明するがね。ところで、実際は四つの次元があって、そのうちの三つを空間の三つの次元と呼び、四つ目のものを時間と呼んでいる。しかし、われわれは、始めの三つと四つ目のものとの間に非現実的な差別の線を引いてしまう傾向があるのだ。というのは、われわれの意識が、たまたま時間という次元にそって、生まれてから死ぬまで断続的に一方的な方向に動いているからなのだ」「それは」と非常に若い一人の青年が、ランプの火で一度消えた葉巻に急にまた火を付けようとしながら言った。「それは……たしかに極めて明瞭なことですね」

「ところで、この事実が非常に多くの人々によって見逃されているということは注目すべきことです」とタイム・トラベラーは、少し機嫌を取りもどしながら、続けた。「これが四次元という言葉の本当の意味なのです。もつとも、四次元という言葉の口にながら、その本当の意味を知らない連中もいるんですがね。四次元というのは時間に対するもう一つの見方に過ぎないんです。時間と空間の三次元のうちのどれかとの相違は、われわれの意識が時間に沿って動くということだけなんです。しかし、或る愚かな連中はその観念を誤解しているのです。その連中がこの第四次元についてどんなことを言ってい

るかごぞんじでしようね？」

「私は知りませんね」と地方の市長が言った。

「それはまあこんなことなんです。数学者が言っているように、空間は三つの次元を持っているという事になっていて、それらをわれわれは縦、横、高さと呼んでいる。

そして、おのおの直角に交わる三つの平面によって限定することができるといふことなんです。しかし、何人かの哲学者たちは、なぜ三つの次元だけに限るのか、その三つの次元に直角に交わるもう一つの方向があったっていいじゃないか、というような問題をずっと以前から提出しているんです。そして、四次元的幾何学をつくり上げようとさえ試みているんです。ほんの一月ばかり前に、サイモン・ニューカム（アメリカの天文学者、一八三五—一九〇九）教授は、ニューヨーク数学協会でこの問題を詳述していました。ごぞんじの通り、二次元しかない平面の上にわれわれは三次元の立方体の像を表現することができます。同様に、三次元のモデルによって、四次元的なものの像を表現できるのではないかと彼等は考えているんです——もしも四次元の透視画法をマスターすることができれば。どうです、わかりますか？」

「なるほどね」と、地方の市長が小さな声でつぶやいた。そして、眉をよせると、じっと考え込んでしまった。そして、口を、秘儀的な呪文でも繰り返しているかのよう

に動かしていた。しばらくすると、「そう、どうやらわかったような気がする」と言つて、一瞬顔を明るく輝かした。

「ところで、実を言うと、僕はしばらく前からこの四次元の幾何学というやつを研究しているんだ。僕が到達した結果の或るものは奇妙なものだ。たとえば、ここに或る一人の人間の、八歳の時と、十五歳の時と、二十三歳の時などの肖像画があるとする。これらはすべて明らかにその人物の断面図であり、いわば、固定して変化しない彼の四次元的存在の三次元的表現なのである」

タイム・トラベラーは、みんなが彼の発言を充分呑みこむまで待つてから話を続けた。「科学者たちは、時間とは空間の一種にすぎないことをよく知っている。ここに卑近な科学的な図表がある。天気の見録図だ。僕がいま指でなぞっている線は、気圧計の動きを示している。

昨日は大変高かったが、夜になって下つた。それから今朝になってまた上がった。非常にゆっくり上がつてここまで来た。水銀は、一般的に認められている空間の三次元のどの次元上においてもこの線をたどらなかつたことはたしかなことだ。そうでしょう？ しかし、たしかに、水銀はそういう線をたどつたのだ。だからして、その線は時間の次元にそつて移動したものだといふ結論を出さなければならない」

「しかし」と医者が、暖炉で燃えている石炭の塊をじつと見つめながら言つた。「もしも時間が本当に空間の第四次元に過ぎないとしたら、何故なにか異つたものと見なされているだろうか、また常にそう見なされてきたのだろうか？ そして、なぜわれわれは、空間の三つの次元の中と同様に、時間の中を動き廻ることはできないのだろうか？」

タイム・トラベラーはにっこりと笑つた。「君はたしかに、われわれが時間の中を自由に動き廻れると思つてゐるのかい？ われわれは前後左右に自由に動くことができる。そして、人間は昔からそうしてきた。われわれが縦横という二つの次元を自由に動けることは僕も認めるよ。しかし、上下はどうかね。地球の引力がわれわれの上下の運動を束縛しているよ」

「必ずしもそうとは言えない」と医者が言つた。「気球というものがあるからね」

「しかし、気球ができる以前は、発作的にさつと跳び上つたり、地表の凹凸を上下したりすることを除けば、人間は上下の運動は自由でなかつた」

「それでも、人間は少しは上下運動が可能だつた」と医者が言つた。

「下る方が上るのより遙かにやさしい」

「そして、人間は時間の中を動くことは全く不可能だ。」

現在の瞬間から脱出することはできないのだ」

「ところが、そこが君の間違っているところなんだよ。まさにそこんとこで世界中の人間が間違っているんだ。

われわれの精神は、非物質的で次元を持たないので、時間という次元に沿って揺り籠から墓場まで同じ速度で動いている。それはもしも、われわれの存在が地上五十哩のところでは始まったとしたら、そこから下降しなければならぬのとちょうど同じことなんです」

「しかし、非常にむずかしい問題は」と心理学者が口をはさんだ。「空間の中はあらゆる方向に動くことができるが、時間の中は動き廻ることはできないということです」

「そこが僕の大発見のきっかけなんだ。しかし、時間の中を動き廻れないというのは間違いですよ。たとえば、ある出来事を僕が極めて鮮明に思い出している時、僕はその事件が起った時点にもどっているのです。いわゆる放心状態にあるのです。一瞬過去に跳びもどるわけだ。もちろんわれわれは一瞬間以上に過去にとどまる方法もっていない。それはちやうど、野蠻人や動物が地上六フィートのところにとどまっていられないのと同じことです。しかし、この点では文明人は野蠻人よりまさっている。気球に乗れば重力にさからって上昇できるからだ。そして、遂には時間の次元に沿っての運行を止めたり加

速したり、或いは方向転換して逆方向に進むことさえできるかもしれないと思つたって何も悪いわけではないだろう」

「おお、これはみんな……」とフィルビーが言い始めた。

「どうして悪いかね？」とタイム・トラベラーが言つた。

「みんな理性に反するよ」とフィルビー。

「どんな理性に？」とタイム・トラベラーがきいた。

「黒を白だと言ひ張ることはできるかもしれないが」とフィルビーが言つた。「僕をそう納得させることは出来ないよ」

「おそらく出来ないだろう」とタイム・トラベラーが言つた。「しかし、君は、僕が四次元の幾何学を研究した目的がわかりだしたようだね。ずっと以前に僕は或る機械をおぼろげながら思い付いたんだ……」

「時間を航行する機械でしょう」と大変若い男が叫んだ。

「それは、空間と時間の中をどんな方向でも自由自在に運転者の思うままに航行できる機械さ」

フィルビーは何も言わないでただ笑っていた。

「しかし、僕は実験によつてたしかめてみたのだ」とタイム・トラベラーが言つた。

「それは歴史家にとっては素晴らしく便利だろうね」と心理学者が示唆した。「たとえば、過去にさかのぼってヘイ

ステイングズの戦（ヘイスティングはサセックス州にある港で、ノルマンジーから上陸してアングロ・サクソンの）の公式の記録が正しいかどうかたしかめることが出来るだろう」

「きつと世人の注目をひきますよ」と医者と言った。

「われわれの祖先は時代錯誤（通例実際より古く誤ること）にはあまり寛大じゃないですからね」

「ホーマーやプラトン自身の口からギリシャ語を習えるかもしれないですね」と非常に若い青年がつぶやいた。

「そんなことすると、学位試験の予備試験で落第させられちゃうぜ。なにしろドイツの古典学者たちがギリシャ語をうんと改良しちゃったからね」

「じゃ未来へ行こう」と非常に若い青年が言った。「まあちよつと考えてごらんなさい！ 有金（おカネ）を全部投資して、

それに利子が付いてどんどんふえるままにしておいて、未来へ向かって駆けて行けばいいってわけか！」

「そして、完全な共産主義社会を発見するだろうさ」と私が言った。

「事もあらうにあんな途方もない理論の上に打ち建てられた社会をかね」と心理学者が言いはじめた。

「そうさ、どうもそういうことに成りそうなんだ。それでその事は伏せておいたのだから……」

「実験による証明！」と私は大きな声で言った。「君はそれを証明しようというのかね」

「実験だって！」とフィルビーが叫んだ。彼は頭脳が少しつかれてきたのである。

「ともかく、君の実験を見せてもらおうじゃないか」と心理学者が言った。「もつとも、どうせインチキにきまってるんだがね」

タイム・トラベラーは、にっこり笑ってわれわれ一同を見まわした。それから、かすかな微笑を浮かべたまま、両手をズボンのポケットに深く突っ込んで、ゆっくりと部屋から出て行った。長い廊下を実験室の方へスリッパを引きずって歩いてゆく足音がわれわれの耳に聞えた。

心理学者はわれわれの顔を見た。「一体どんな物造ったのかな」

「なんか手品みたいなものじゃないかな」と医者と言った。そして、フィルビーがバーズレムの町（イングランドの中西部スタッツフォードシャーの町。陶器で有名。一九〇〇年セントヤク・オン・トレントに合併）で見かけた手品師の話をはじめたが、序の口も終わらないうちにタイム・トラベラーが戻って来たので、その話は打ち切りになってしまった。

タイム・トラベラーが片手に持っているものは、きらきら光る金属の枠組で、小さな掛け時計とはほぼ同じぐらいの大きさで、非常に精巧に出来ていた。その中には象牙と、何か透明な結晶体が入っていた。さて、ここでははつきり詳細に述べなければならぬ。というのは、次のようなことは——もしも彼の説明を真実として受取ら

ない限りは——絶対的に説明不可能なことだからである。彼は部屋のあるちに置いてあった小さな八角形のテーブルの一つを取ると二本の脚が炉辺の敷物の上にのるようにして、暖炉の火の前に置いた。そして、このテーブルの上に例の機械を置くと、椅子を引きよせて坐った。

テーブルの上にはその他には何もなく、ただかきの付いた小さなランプがあるだけで、その明るい光が模型を照らしていた。部屋の中には、おそらく一ダースほどのローソクがあつて、そのうち二本は炉棚（カマド）の上の真鍮の燭台に立っていて、あといくつかは壁の燭台に立っていたので、あたりは大変明るかった。私は暖炉に一番近い椅子に坐っていた。そして、この椅子を前へ引き出したので、私はタイム・トラベラーと暖炉のほとんど中間の位置を占めた。フィルビーは彼のうしろに坐つて肩越しにのぞきこんでいた。医者と地方の市長が右側から、心理学者が左側から、彼の横顔をながめていた。大変若い青年は心理学者のうしろに立っていた。われわれはみんな目を見開いて見ていた。こういう状態のもとでは、どんな手品を使つてもわれわれの目をごまかすことは出来ないように思われた。たとえ、その手品が、あらかじめいかに巧妙に考えられていたとしても、またいかに巧みに行われたとしても。

タイム・トラベラーはわれわれを見廻してから機械の

方へ目をやった。「じゃあ説明してくれ給え」と心理学者がうながした。

「この小さな物は」とタイム・トラベラーは、テーブルに両肘をつき、機械の上で両手を握りしめながら言った。

「単に模型にすぎない。時間を旅行する機械の設計雛型なんです。奇妙にゆがんで見えるのと、この棒状のものが奇妙にぴかぴか光つて、少しも現実のものには思われないうまいのに気が付くでしょう」彼はそう言つてその部分を指で差し示した。「また、ここに小さい白いレバーが、そしてここにももう一つあるでしょう」

医者は椅子から立ちあがつて、その機械をのぞきこんで、「美しくできているね」と言った。

「つくるのに二年かかったよ」とタイム・トラベラーが言い返した。われわれがみんな医者のまねをしてその機械を見終ると彼は言った。「さて、このレバーを押すと機械は未来の方へ向かつてすべりこんで行くし、もう一つのレバーを押すと戻つて来るのだということをはつきりわかつてほしいのだ。このサドルはタイム・トラベラーの坐席なのだ。もうすぐ僕はこのレバーを押すが、そうすると機械は飛んで行くだろう。それは姿を消し、未来の時間の中へ入つて行き、見えなくなるだろう。よくこの機械を見てくれ給え、そして手品やごまかしのないことをたしかめてくださいよ。この模型が飛んで行つて無

くなったあげくに、ペテン師よばわりされたんじゃないからね」

一分ほどみんなが黙っていた。心理学者は私に話しかけようと思ったらしかったが、考えを変えてしまったらしい。それから、タイム・トラベラーがレバーの方へ指を差しだした。「いや、よそう」と彼は急に言った。「君の手を借りよう」そして、心理学者の方を向くと、彼の手を取って、人差し指を出すように言った。だから、タイム・マシンの模型を無限の旅へ送り出したのは心理学者だった。われわれはみんなレバーが動くのを見ていた。ペテンでないことは全くだしかだった。さつと風が吹き、ランプの焰がとび上がった。炬棚の上に立っていたローソクが一本消え、小さな機械は突然くるくるまわりはじめ、姿がおぼろげになり、一瞬は幽霊のように見え、かすかに光る真鍮と象牙の渦巻のように見えた。そして、それは飛び去ってしまった——姿を消してしまつた。ランプのほかにはテーブルの上には何もなかった。また一分間ほどみんなはだまりこんでいた。それから、フィルビーが、「畜生、まけた」と言った。

茫然自失していた心理学者は、われに帰ると、突然テーブルの下をのぞきこんだ。それを見ると、タイム・トラベラーは愉快そうにくすぐす笑った。「あの機械どうです？」と、心理学者のさっきの言葉を思いだしながら言っ

た。それから椅子から立ちあがると、炬棚上のタバコ壺のところへ行くと、われわれの方に背中を向けてパイプにタバコをつめはじめた。

われわれはお互に顔を見合せた。「ねえ君」と医者が言った。「これは本気なのかい？　あの機械が時間の中へ旅行して行つたと本当に信じているのかい？」

「本当だとも」とタイム・トラベラーは、点火用のこよりに火を付けようとして、かがみこみながら言った。それから、パイプに火をつけながら、心理学者の顔を見ようと振り向いた。（心理学者は、頭が混乱などしていないということを示そうと思つて、葉巻を一本取つて端を切らないまま火をつけようとしていた）「それどころか、あそこであの模型をもとにして大きな機械をほとんどこしらえあげてしまつたんだ」と言いながら研究室の方を指さした。

「本当にあの機械が未来の方へ旅行して行つたと言うのかい？」とフィルビーが言った。

「未来の方へ行つたのか、過去の方へ行つたのか、どっちだかはつきりは分らないね」

ちよつとたつてから心理学者はインスピレーションをえたらしく言った。「たしかにあれば過去の方へ行つたに違いないよ」

「なぜです？」とタイム・トラベラーがきいた。

「というのは、あれは空間の中を飛んだのではないと思うからだ。そして、もしも未来の中へと旅行して行つたとするならば、あの機械は今でもずっとここにいることだろう。なぜなら、今という時間の中を旅行したにちがいないから」

「しかし」と私が言った。「もしもあれが過去の中へ行つたとしたら、僕たちがさっきこの部屋に入つて来た時見たはずですね。先週の木曜日に来た時も、先々週も、更にその前の週もといった具合に」

「なかなかきびしい反対論ができましたな」と地方の市長が、公平な態度を取りながら、タイム・トラベラーの方を向いて言った。

「全然問題にならない」とタイム・トラベラーが答えた。そして、こんどは心理学者の方に向かって言った。「考えてみ給え。君なら説明できるよ。國下の表象、稀薄にした表象というやつだよ」

「勿論そうですよ」と心理学者が言った。そして、われわれに対してこう説明した。「それは簡単な心理学的問題なんだ。もっと早く考えつければよかった。極めて明瞭なことなんだ。この逆説を簡単に説明するのに役に立つのです。われわれがこの機械を見たり識別することが出来ないのは、ちょうど廻転している車輪の幅や、飛んでいる弾丸が見えないのと同じことなのだ。もしも、あの機

械がわれわれの五十倍か百倍の速さで時間の中を航行するならば、或いは、われわれが一秒を通過する間に一分を通過するとするならば、それがわれわれに与える印象は、時間の中を航行しないとした時に与える印象の五十分の一か百分の一になるのは当然のことです。それは極めて明白なことだ」彼は、機械があつた空間を手でさつと切ると、「わかつたでしよう」と笑いながら言った。

われわれは坐つたまま何もないテーブルの上を一分間ほど見つめていた。それから、タイム・トラベラーはわれわれに、諸君はどう思いますかね、ときいた。

「今晚のところはもっともらしく思えますがね、まあ明日まで待つてもらいましよう」と医者が言った。「朝になつてわれわれが常識を取りもどすまで」

「模型じゃなくて本物のタイム・マシーンをごらんになりませんか？」とタイム・トラベラーがきいた。そして、こういうとすぐランプを手に取り、すき間風の吹く、長い廊下を研究室の方へとわれわれを案内して行つた。私は、ランプの灯りがちらつき、奇妙で大きな彼の頭が影絵のようにはっきりと見え、そして、われわれの黒い影が踊つていたのをはっきりと思ひだす。われわれは、当惑しながらも、簡単には信ずることが出来ずに彼のあとからついて行つた。そして、研究室に入ると、さつきわれわれの目の前から消え去って行つた小さな模型よりも